

北京語言大学日中同時通訳修士課程における通訳実習の特徴と課題

岩本 明美

(大阪外国語大学大学院 S)

The Master's Program (in Interpreting and Translation Studies) at Osaka University of Foreign Studies (OUFS) Graduate School and the Master's Program in Simultaneous Interpretation at Beijing Language and Culture University (BLCU) entered into an academic exchange agreement in 2005. As the first (Fall 2006) exchange student from OUFS, I attended the BLCU program, which is receiving great attention as the first to train Chinese-Japanese simultaneous interpreters at the graduate school level in China. I describe the BLCU program and the survey data from its students. In comparison, I note the BLCU's superiority in practical coursework and the OUFS's superiority in theoretical coursework. Finally I offer proposals for the future based on the complementary natures of the programs. The author hopes that this report will not only provide detailed information about the BLCU program, but also help contribute to promoting further mutual understanding and cooperation between the two universities.

1. はじめに

2005年9月、筆者の在籍する大阪外国語大学大学院博士前期課程通訳翻訳学専修コースと北京語言大学研究生院外国語学院日語系日語語言文学専攻（以下、北京語言大学大学院日中同時通訳修士課程とする）¹⁾との間に学術交流協定が結ばれた。筆者は、大阪外国語大学からの第1期交換留学生として、2006年10月から2007年7月まで、北京語言大学当該課程において授業に参加する機会を得た。

IWAMOTO Akemi, "The characteristics and issues of Interpreting Practicum in the Master's Program in Japanese-Chinese Simultaneous Interpretation at Beijing Language and Culture University."

Interpretation Studies, No. 7, December 2007, Pages 231-267.

(c) 2007 by the Japan Association for Interpretation Studies

北京語言大学は、当時としては外国人留学生への中国語教育を専門に行う中国で唯一の大学として1962年に創設された。その後、中国人学生を主体とする学部も設置されて、外国語学院（以下、外国語学部とする）には、早くから日本語学科が設置されていた。

2003年9月には、在職者対象の「漢日同声伝訳培訓班」（以下、日中同時通訳養成コースとする）が発足し、さらに翌2004年9月には日中同時通訳修士課程が同大学院に設置された²⁾。当該課程は大学院での日中同時通訳者養成を目指す、中国（大陸）で初めてのプログラムであり、国内外の日中通訳学習者、教育者、学術機関から広く注目を集めている。

本稿の目的は、筆者が受講した授業の内容および講義最終日（2007年7月2日）に実施した受講生対象のアンケート結果などを紹介することである。それらを通じ、日中通訳に的を絞り、いち早く開設されたこのコースの通訳実習講義の特徴や、今後改善すべき点について一学生の視点から考察を行う。現在、日本の大学および大学院でも日中通訳者・翻訳者養成の講座、コースの開設が模索され、活発な議論が交わされている³⁾。当該課程の実情を日本に伝え、その共有化をはかりたいと考える。本稿が、共通課題の解決およびそれに向けた協力のあり方を模索していく上での契機となることを望んでいる。

2. 日中同時通訳修士課程カリキュラムの概要

中国の大学院修士課程は、基本的に3年制がとられている。北京語言大学大学院日中同時通訳修士課程では、1年生の段階で、ほぼ全ての必修科目および共通科目を履修し、2年生を対象に開講されるのは2科目のみである（表1）。2年生を終えた時点で、修士論文以外の修了要件単位を取得していることになる。3年生対象の科目は開講されず、3年生の時間の大半は論文執筆に当てられる。

また、当該課程では「言語学入門」「日本語文法概論」「比較言語学」などの言語学および「日本古典文学」「日本近代文化」を中心とした理論科目と、「通訳理論と実践」「同時通訳実践」など実践科目が設定されている。共通科目を除き、所属コース外の科目を履修することは稀であり、基本的に上記のカリキュラムをこの課程に在籍する学生全員が履修している。

3. 通訳実践授業の内容

表1からも分かるように、通訳実習授業は、M1の学生対象のものが2科目、M2の学生対象のものが1科目、計3科目がそれぞれ50分1コマ、2コマ連続で週1回行われている。対象学年が設定されているものの、担当教員に事前に申し出さえすれば原則的には当該コース在籍の学生は学年を問わず全ての授業に参加可能である。なお、これらの通常授業以外に、1年に1～2回、北京語言大学

表 1 専攻科目時間割表 (例)

修士課程 1 年 (M1)

第 1 学期 (2006 年 9 月～2007 年 1 月)

	月	火	水	木	金
1・2					日本古典文学
3・4			通訳理論と実践 (一)		通訳理論と実践 (一)
5・6	日本語文法概論	日本近代文化	比較言語学		
7・8				言語学入門	

第 2 学期 (2007 年 3 月～2007 年 7 月)

	月	火	水	木	金
1・2					
3・4	通訳理論と実践 (二)		日本近代文学		
5・6		通訳理論と実践 (二)	日本語文法研究		
7・8	対照言語学		研究方法・論文 作文		

修士課程 2 年 (M2)

第 1 学期 (2006 年 9 月～2007 年 1 月)

	月	火	水	木	金
1・2					
3・4					
5・6				語彙論	
7・8		同時通訳実践 (一)			

第 2 学期 (2007 年 3 月～2007 年 7 月)

	月	火	水	木	金
1・2					
3・4		同時通訳実践 (二)		日本語特殊専攻	
5・6					
7・8					

客員教授である塚本慶一杏林大学教授、および津田守大阪外国語大学教授により、それぞれ中国語通訳論・翻訳論、司法通訳翻訳学などの集中講義が行われていることもここで申し添えておく。筆者が留学期間中に参加することができたのは、塚本教授による集中講義である。時事問題を反映した資料をもとに、教授自身の豊富な実務経験に基づくアドバイス、指導を挟みつつ、学生に積極的に実践を行わせるという内容のものであった。

次に、3科目の通訳実習授業について、授業のねらいや具体的内容、そしてそれに対する受講生の反応、変化について述べる。

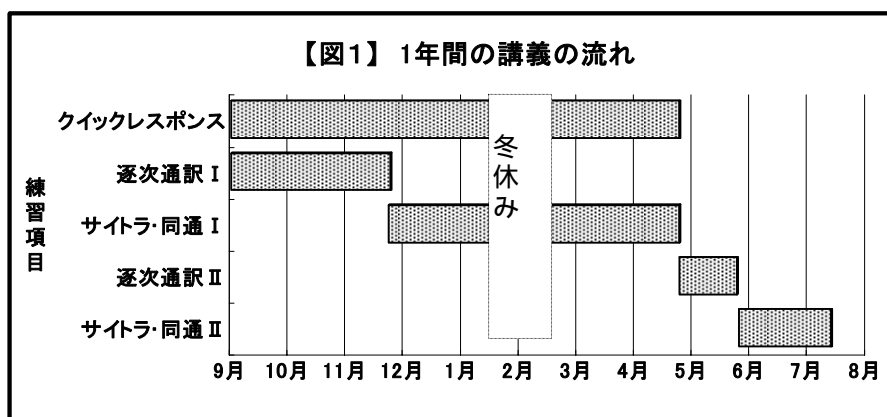
3.1 「通訳理論と実践（中日通訳）」について

9月開講時に、当該科目の目的・目標とそれに沿った計画の概要、定期課題の目的と意義などが担当教員によって説明される。表2に授業シラバスを示す。

表2 「通訳理論と実践（中日通訳）」の授業シラバス概要

授業科目名	通訳理論と実践（中日通訳） ⁴⁾	単位	4
担当教員	日本人	開講区分	通年
教室	同時通訳演習室（第1教学楼901号教室）	毎週時数	2
成績評価方法	定期課題（毎週）：通訳翻訳学・言語学関連の指定書籍についてのレポートもしくは修士論文に関連するレポート（2000字以上、母語可） 定期試験（2回）：指定テーマに沿ったレポートもしくは修士論文関連レポート（5000字以上、母語可）		
参考指定文献 （一部）	<ul style="list-style-type: none"> ・『释意学派口笔译理论』 玛丽雅娜·勒代雷，刘和平，中国对外翻译出版公司，2001/1 ・『语言论—言语研究导论』 爱德华·萨丕尔，陆桌元译，商务印书馆，1964 ・『当代法国翻译理论』 徐钧主编，湖北教育出版社，2004/2 ・『通訳メソッドを応用したシャドーイングで学ぶ 中国語難訳語 500』 長谷川正時，スリーエーネットワーク，2006/4 		

授業スタイルは年間ほぼ一貫しており、非常に体系的であり、下記、図1のような流れとなっている。



授業開始後、最初の15分間程度を利用してクイックレスポンスを行ってから、通訳実践部分に入る。通訳実践部分は、逐次通訳第1段階、サイトトランスレーション・同時通訳第1段階、逐次通訳第2段階、サイトトランスレーション・同時通訳第2段階（以下、それぞれ逐次通訳、サイトラ・同通、逐次通訳、サイトラ・同通とする）という3つの段階に分けられ、徐々にステップアップしていく形をとっている。各段階の具体的内容については後段で述べる。

授業では、スピーカーの発言を情報として捉え、インプット 記憶保持 アウトプット（訳出）するといったスキル面のみを重視するのではなく、訳出時の間の取り方、声質、目線などの立ち居振る舞い、マナーも含めた聴衆を常に意識した総合的なパフォーマンスが強く求められる。そのため、授業はつねに臨場感、緊張感に満ちている。当然のことながら、途中で周囲に助けを求めたり、「分かりません」と言って通訳自体を放棄したりすることは原則として認められない。毎回このような緊張感とプレッシャーに満ちた授業に参加し続けること自体が、今後いかなる状況にあっても、自分の本来の力を安定的に発揮するための精神力・集中力を養うことにつながる。

a) クイックレスポンス

教員がひとつの文章（日本語）を読み上げ、学生はメモを取らずに聞く。そして、順不同に指名された受講生が訳出を行うというスタイルで進められる。使用された教材は『通訳メソッドを応用したシャドーイングで学ぶ 中国語難訳語 500』（長谷川正時著）である。聞いたときに訳しづらいと感じる表現の日本語が多く、日常の簡単なやりとりではなかなか出現しない各種の日本語表現を取り上げ、中国語の表現力向上と中国語を母語とする学習者の日本語の表現能力向上に有効な練習方法であった。⁵⁾

この練習を行うことにより、中国人受講生たちはまず「聞き取れない」ということと自分のボキャブラリーの貧しさに、そして、日本人受講生は、「どう訳していいかわからない」と、自分の中国語表現能力の乏しさにそれぞれショックを受

けることになる。通訳訓練および実務ともに未経験である者が大半を占める受講生たちは、このように、「通訳とはコード変換などといった機械的な言葉の置き換えでは対応できない」という通訳の難しさをまず自ら体験することになる。

b) 逐次通訳

通訳を行う前段階としての基礎練習のうち、シャドーイング、ノートテイキングなど各基礎練習方法に関しては説明および実践の時間は設けられない⁶⁾。受講生は各自でそれらを勉強し、練習した上で授業に望むことになる。したがって、授業時間の大部分は、通訳の実践に充てられており、実習授業としての効率は極めて高い。

今回のテーマは1週間前に予告され、受講生はそれに基づいて各自準備を行い授業に参加する。ネイティブである中国人学生1名が1パラグラフを読み上げ、担当教員が順不同に学生を指名するスタイルを取る。通常授業の着席形態で通訳を順番に行うばかりではなく、時にスピーカー役の学生と通訳者役の学生が教壇に立ち、通訳を行うなど、2人のスピーカーの間、やや後ろに通訳者が着席するといった記者会見形式での通訳なども行われる。

初期の段階では、筆者を含め、学生たちはノートテイキングに集中しすぎるあまり話の意図や文章の全体的構造を理解できていなかったと、通訳する時になって気づき、さらには苦勞してとったそのメモが読解不能であるなどの典型的な失敗に陥っていた。第1学期開始直後の時期には、黙り込む、あるいは「メモが分からなくて通訳できません」など通訳放棄発言をする学生も一部見うけられたが、第2学期に入るとそのような反応の学生は激減した。

その理由としては、ヒアリングの向上と、聞き取れた部分に基づき内容をある程度、推測するようになったことが挙げられる。そしてそれに加え、絶対に黙り込まずに、自分なりの語彙と表現を駆使して情報を伝えようという姿勢の変化が顕著に見られた。

c) サイトラ・同通

まず初めにスラッシュリーディングとサイトラの意義や具体的方法について体系的な説明が行われる。この段階では、1週間前に原稿が配布されるので、学生は各自、単語等を調べ十分な練習を行ってから講義に臨むことが大前提となる。個人練習については、同じ原稿で何度も繰り返し練習することが必要であるとの指導を受けた。受講生は実際に一つの原稿をもとに何度もサイトラを行い、毎回さまざまな表現方法、文の処理方法を試みた。そして、それが本番での反応の速さや処理の的確さにつながるという実感を得ることができた。

受講生にとっては、視覚によって原稿から得られる情報、すなわち中国語の影響をいかに排除し、適切な語彙や表現の選択を素早く行った上で、いかに自然な日本語で訳出するかが、サイトラを行う上での最初の課題となる。中国語と日本

語はともに漢字を使用する言語であり、原文（中国語）で使用された単語をそのまま日本語読みしてしまうなどのミスは日本人学生でも犯しがちであり、中国人学生においてはさらに頻繁にみられる。これを克服することは容易ではなく、継続的練習が必要である。サイトラに慣れるに従い、今度はそのスピードアップが求められるようになる。中文日訳を行う場合、中国人学生は A4 サイズ原稿 1 枚あたり 5 分 30 秒、日本人学生は 4 分 30 秒という目安を提示された。スピードアップに伴い、原稿から得られる全ての情報を訳出するのではなく、要点やキーワードを瞬時に把握することによって、できうるかぎり簡潔な内容にまとめる力が必要となってくるということに自ずと気づかされることとなる。

サイトラを一通りこなした後、各同通ブースに 2 名ずつ入り同時通訳を行う。機材使用方法およびブース内でのマナーの説明がなされ、聴衆やパートナーへの配慮等の注意が喚起される。受講生たちは、ブース内の全ての雑音を抑えること、パートナーのサポート方法などを学ぶと同時に、通訳中の表情、目線、声質に至るまで常に意識し、聴衆に安心感を与える必要性を強く意識するようになった。同時通訳初体験の M1 の学生はブース内への原稿の持ちこみが可能であるが、M2 の学生は基本的に原稿を持たない。

また、M2 であっても慣れてくればできるだけ原稿から目を離し、目線を上げて通訳を行うことが望まれる。同時通訳を初めて体験する学生に与えられる第 1 の課題は、「途中で通訳を諦めないこと」「いったん訳出した文章は必ず完結させること」であった。始めは予め準備し練習して、頭に原稿を叩き込んできた学生も、次第に握り締めていた原稿から目を離し、ガラス越しのスピーカーを見つめ、臨機応変に訳出量を調整したり、表現を変えたりすることができるようになっていった。

d) 逐次通訳

前段階である逐次通訳 と大きく異なるのは、生音声であるという点である。オンラインで公開されている音声などを利用する。例えば、中国国務院（日本の内閣に相当）主催の「2007 年政府活動報告」に関する温家宝総理の国内外共同記者会見等が題材として取り上げられた。なお 1 ヶ月前の時点で、政府活動報告の読み込みが課題として与えられている。周囲の雑音が混じる上に、各スピーカーの話のスピード、間合い、表現方法そして独自の訛りは千差万別である。前段階でサイトラ・同時通訳に集中的に取り組んできた学生たちは、すべての情報を訳出するのではなく、情報のある程度簡略化することに重点を置いてきた。この段階で、もう一度逐次通訳を行うことは、情報をほぼ 100% 訳出する必要があり、なおかつ TL（目標言語、ここでは日本語）をより自然で美しいものにするため情報の並べ替え、組み換えが必要である逐次通訳を見直すことに有効であった。逐次通訳と同時通訳を交互に行うことで両者の相違点や留意すべき点が明らかにな

り、受講生が個々の語学力および通訳スキルを効率的にブラッシュアップしていく上での方法の模索、今後の目標の設定につながった。

e) サイトラ・同通

1年間の総仕上げを行うこの段階では、原稿が事前に配布されることはない。学生は事前に伝えられたテーマについて各自予習し、背景知識を掴んだうえで講義に臨む。4～5枚の原稿（A4サイズ）が、授業の冒頭で配布され、5分間程度の時間が与えられる。学生たちはほぼ初見に近い状態でサイトラ、そして同時通訳を行うこととなる。これまでは、授業で通訳の実践を行うことにより、各自の家での個人練習の成果を確認するといった意味合いがこめられていた。しかし、この段階では学生たちがそれぞれのヒアリング力、反応の速さ、表現や語彙選択のセンスなど本当の実力を知り、それに対する危機感と自信をもち、さらに今後の自分の課題を見出すことに重点が置かれている。表3に、当該授業で使用された教材の一部を示す。

表3 使用教材例

逐次通訳	WTO 香港会議に関する薄熙来中国商務部部長の記者会見
	商務部長薄熙来就 WTO 香港会议答记者问 http://politics.people.com.cn/GB/1027/3955727.html
サイトラ・同通	第10回日中経済シンポジウムでの武藤日本銀行副総裁のスピーチ
	日本銀行副総裁武藤敏郎：面向亚洲经济持续增长 http://www.people.com.cn/GB/jingji/8215/33039/33040/2537097.html
逐次通訳	人民大会堂での温家宝総理の国内外記者会見
	温家宝总理在人民大会堂答中外记者问 http://news.sohu.com/20070316/n248775133.shtml
サイトラ・同通	立命館孔子学院における王毅駐日中国大使の講演
	王毅大使在立命馆大学孔子学院的演讲 http://www.fmprc.gov.cn/ce/cejp/chn/sgxx/t223214.htm

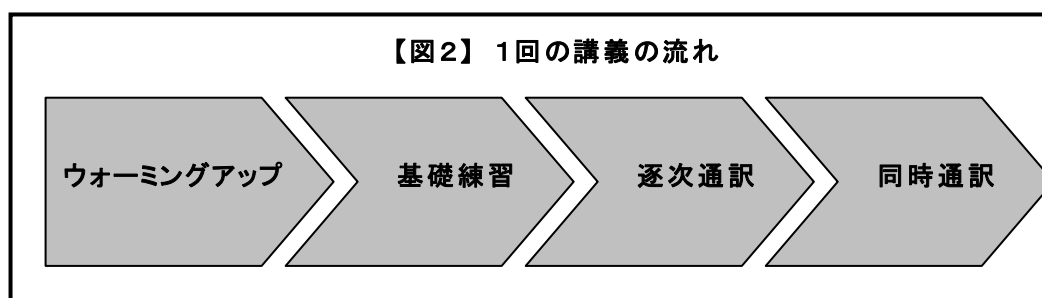
3.2 「通訳理論と実践（日中通訳）」について

表4に本科目の授業シラバスを示す。毎回の講義は図2の通り、おおむね4つのステップに分けて行われる。

表 4 「通訳理論と実践（日中通訳）」の授業シラバス概要

授業科目名	通訳理論と実践（日中通訳）	単位	4
担当教員名	中国人	開講区分	通年
教室	同時通訳演習室(第1 教学楼 901 号教室)	毎週時数	2
成績評価 方法	定期課題（不定期）：通訳翻訳学・言語学関連の指定書籍に関するレポート 定期試験（2 回）：シャドーイング・同時通訳（日中・中日）などの実技試験		

まず、ウォーミングアップ（詳細は後述を参照）が 10～15 分間程度行われ、その後、基礎練習が行われる。基礎練習の内容は、シャドーイング、ノートテイキング、パブリックスピーキングなどであり、毎回の講義ごとにいずれか一つの方法を中心に基礎練習が行われる。ここで使用される資料や原稿は、次のステップで行われる逐次通訳の内容に関連しており、単語や背景知識の再確認も兼ねている。その後に、逐次通訳を行い、授業の最後 20 分程度は同時通訳を行う。各ステップの具体的内容は後段にて述べることとする。



1 人の学生が通訳を行うごとに、聞き手である受講生数名が、聞き取った情報に誤りはないか、文法や語彙選択に誤りや改善点がないかも含めて全体的パフォーマンスへの評価を行う。しかし、後に提示するアンケート結果からでも分かるように、学生の大半が通訳未経験で知識にも限りがあるため、一歩踏み込んだ具体的な批評やアドバイス、評価を下すのは難しく、通訳者役の学生もそのコメントに熱心に耳を傾けるものの、具体的にどのように対応、処理すべきであったのかというところまではなかなかたどり着けていないというのが現状であった。

a) ウォーミングアップ

ここでは主にリプロダクションが行われる。使用教材は、宴会やスピーチでの決まり文句に始まり、文学作品の一節、スピーチ原稿など様々であり、分野も多岐に渡っている。

b) 基礎練習

• シャドーイング

ネイティブである日本人学生が文章を読み上げ、それについて他の受講生がシャドーイングを行うスタイルをとる。ただし、この練習はごく初期の講義数回のみ用いられ、その後は学生が各自で練習することとなった。

• ノートテイキング

ノートテイキングの技術などについて特に時間を割いて説明を行うことはしない。行われるのはノートテイキングの実践のみである。

• パブリックスピーキング

通訳者は、集中力を途切れさせることなく、平常心を保ち、安定したパフォーマンスを見せなければならない。中国人学生の大半は学部するときにもゼミ形式の授業に参加した経験がなく、人前で自分の意見を話す機会も限られていた。そしてごく初期の段階では、通訳経験のない受講生の一部は、人前で通訳を行うこと自体に極度に緊張し、力が発揮できないといった状況が見られた。このような学生の現状に対応する形で行われたのがパブリックスピーキングである。スピーチのテーマはその場で伝えられ、5分程度の時間内で準備を行う。また、使用言語は日本語、中国語のいずれでもよいとされている。

• サマライゼーション

基本的に音声を聞いてサマライゼーションを行うというスタイルをとる。日本語から日本語へ、日本語から中国語へ、という2つのパターンを中心に行われる。SL（起点言語、ここでは日本語）が母語でない中国人学生のうち半数以上は、1年生の第1学期最初の2、3ヶ月の時点では、通訳よりも要約のほうが難しいと訴えていた。この練習においては、スピーカーの話の要点や意図、キーワードなどを瞬時に把握することが求められるので、実際の通訳の場面にもつながるという点において有効な練習方法であった。

c) 逐次通訳

基本的に1パラグラフにつき1人の学生が逐次通訳を行う。日文中訳がメインである。その後、学生1人ないし2人が、通訳内容、情報の正誤、原文の解釈、これに加え、TL（ここでは中国語）がノンネイティブの場合は、文法的誤りなどを交えてコメントをつける。

前段でも述べたように、ウォーミングアップや基礎練習のときに関連の内容に触れている場合は、受講生にとっては聞きなれて馴染んできた内容であるため、そのパフォーマンスもやや安定していたといえる。またこれとは異なり、「何について通訳するのか」「スピーカーは一体誰なのか（氏名、立場、肩書、国籍）」「どのような場で通訳が行われるのか」などの関連情報がまったく与えられず極度に緊張した状態で、学生1人が指名され、教壇近くにその他の受講生と向かい合う

形で立ち、通訳を行うように指示される場合もあった。

このような練習方法の意図が、通訳を行う学生にプレッシャーを与えることにあるという点は受講生全員が理解していた。しかし、実際の通訳の現場で、通訳者本人がスピーカーのことも、どのような場面に自分がいるのかも分からないまま通訳を始めるといった状況が実際に起こりうるのだろうかという点に疑問を抱く学生がいたことも確かであった。この授業では、通常の着席形態で通訳を行うほかに、スピーカー役の学生と通訳者役の学生が教壇に立ち通訳を行うなど、2人のスピーカーの間、やや後ろに通訳者が着席するといった記者会見形式での通訳など、さまざまな方法による積極的な取り組みが行われている。

d) 同時通訳

機材の使用および操作方法、ブース内でのマナーなどは 2.2.1 で述べた講義時間内にすでに行われているという状況であったため、その説明などは省略されている。前段階での逐次通訳で用いた原稿を使用し、授業の最後 15～20 分間で内容の確認と総仕上げという意味もこめて同時通訳を行う。各ブースに 2 名ずつ入り交代で通訳を行う。また、時には 1 人ないし 2 人の学生が選ばれ、1 人ずつブースに入り、他の学生の前で同時通訳を行うといったことも行われた。

3.3 「同時通訳実践」について

表 5 に本科目の授業シラバスを示す。この科目は基本的に 2 年生を対象とするクラスであり、通訳基礎練習は行われない。これまでに述べた 2 つの科目よりも一層実践を重視した授業形式が取られている。

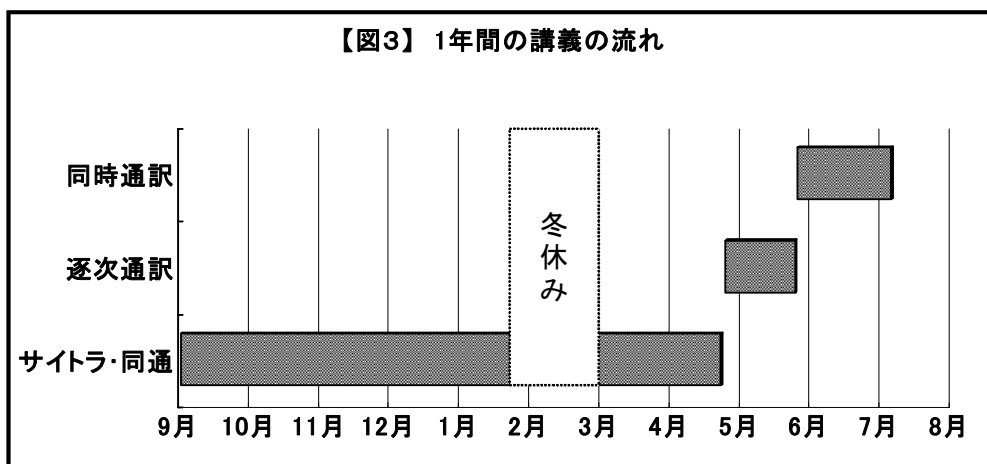
表 5 「同時通訳実践」の授業シラバス概要

授業科目名	通訳理論と実践	単位	4
担当教員名	日本人	開講区分	通年
教室	同時通訳演習室(第 1 教学楼 901 号教室)	毎週時数	2
成績評価	出席率および平常点による評価		
方法	定期課題、定期試験なし		

授業は、各同通ブースに学生が 1 人ずつ入って通訳を行うスタイルと基本としつつも、時には 2 人ずつブースに入りチームワークを考えつつ通訳を行ったり、ブース内に残った数人の学生の通訳を外にいる学生が聞いたりなど、さまざまなスタイルが取られる。このようにして学生 1 人 1 人が、互いの通訳パフォーマンス

スを参考にし合い、適度なプレッシャーを与えあう環境が作り出されている。

1年間の授業の流れは図3の通りである。サイトトランスレーション・同時通訳（以下、サイトラ・同通とする）、逐次通訳、同時通訳と段階的に進められる。各段階の具体的内容については後段で述べる。どの段階においても、一通り通訳を終えた後は、必ず担当教員より各学生について評価できる点、改善すべき点などを含めた個別の評価と指導を得ることができる。



a) サイトラ・同通

この段階においても、1週間前に予告されたテーマについて予習を行ってくるという前提は変わらない。ただし、教室では、学生は原稿を手にすることのないまま1人ずつブースに入り、まず同時通訳を行う。2年生である受講生は全員、1年次にすでに「通訳理論と実践（中日通訳）講義」を履修しているため、予め配布された原稿に基づく予習と練習が前提、という同時通訳は行わない。より本番に近い通訳練習を行うことを通じ、臨機応変に文の処理方法を考え、表現力、語彙選択力、センスを磨く段階であるといえる。通訳後、原稿が配布される。教員より個別にコメントを貰い指導を受けると同時にいくつかのポイントをピックアップし、適訳や背景知識についての説明や解釈が行われる。

次に1人を残し、あとの学生はすべて1人ずつブースに入る。残った学生はサイトラを行う。なお、ここで使用される原稿は前段階a)で使用されたものであるものの、配布されて10分足らずであり、ほぼ初見に近い状態である。サイトラを担当する学生が黙り込んでしまえば、当然のことながらブース内の通訳も行えなくなる。このように緊張感に満ちた状況でサイトラを行うことができる。

b) 逐次通訳

図2にあるように9月から5月末まで同時通訳のみを行っていたが、ここで一

度同時通訳を離れ、逐次通訳を行う。その理由は 2.2.1 d) において既に述べているのでここでは省略する。生音声を使用するため、スピーカー自身の方言や独特のアクセントなどの特徴に慣れなければならない。また SL（ここでは中国語）の言語的特徴や表現の影響をできるだけ排除し、日本語としてより自然な表現方法での訳出も求められる。そのために、情報量を保持しつつ、文の構造を大幅に組み替えたりすることの重要性がとくに重視された。

c) 同時通訳

1 週間前に通訳内容やテーマ、会議名などの基本情報が告知されると同時に関連資料を受け取っており、学生は各々が準備を行った上で授業に臨む。生音声を利用し、原稿は原則的に授業前も後も配布されない。

既に述べたが、中国では大学院修士課程 3 年生対象の授業は開講されず、修士論文の執筆に専念させるというカリキュラムを組む大学が多い。したがって、M2 の後期というのは、入学以降、逐次通訳・同時通訳を学んできた学生にとって、実質上、最後の段階である。この授業を受講する M2 の学生は、最後に実際の国際会議などの生音声に加え、原稿なしという状態で同時通訳に臨む。このような同時通訳への挑戦は、学生に自信を与えるためのものではなく、むしろその逆である。そして、それこそがこの授業のねらいである。第一線で活躍するプロの通訳者と学生である自分との力の差を把握し、今後のレベルアップのための課題を各自見つけ、という状態で、学生はこの学期を終えることになる。表 6 に当該授業で使用された教材の例を示す。

表 6 使用教材例

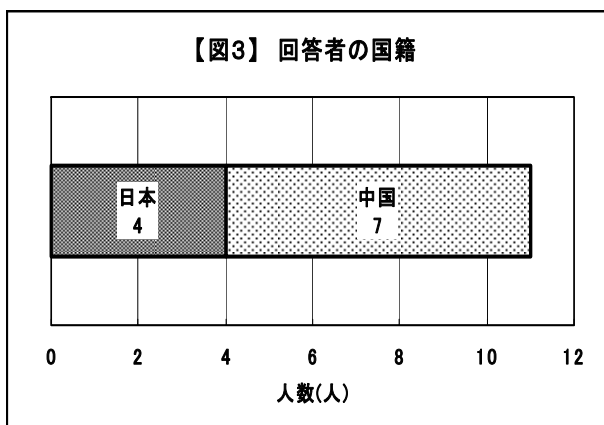
サイトラ・同通	「葫芦島在留日本人 100 万人大送還」60 周年記念・中日関係展望フォーラムの開幕式での唐家璇国务委員のスピーチ 唐家璇：以史为鉴面向未来 努力推动中日世代友好 http://news.xinhuanet.com/newscenter/2006-06/25/content_4746445.htm
逐次通訳	中国の外交と国際問題に関する李肇星外相の国内外記者会見 李肇星就中国外交工作和国际问题答中外记者问 http://news.xinhuanet.com/misc/2007-03/06/content_5810368.htm

4. 受講学生対象アンケートの結果および解説

2007 年 7 月の時点で、北京語言大学大学院日中同時通訳コース修士課程には 1 年生 5 名（すべて中国人、全員女性）、2 年生は現在日本へ留学中である 4 名を含

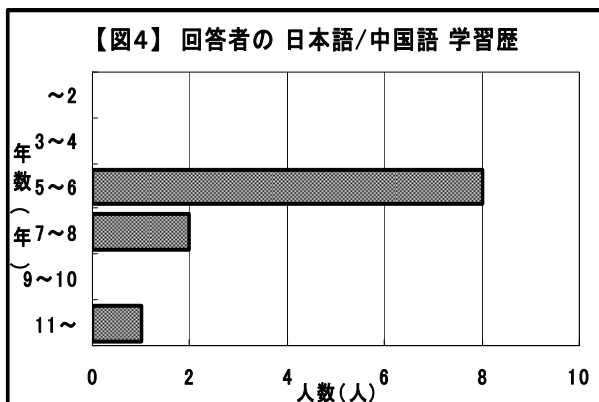
め、合わせて8名(日本人1名、中国人7名、全員女性)が在籍している。2007年7月2日、第2学期最終日に、当該コースにて通訳実践授業を実際に受講している学生11名を対象に、通訳実習授業3科目の中で各自が履修する科目についてのアンケートを行った。以下は、その結果をまとめたものである。学年・国籍を問わず、該当する科目を履修した全ての学生の協力を得ることができた。

4.1 アンケート回答者のバックグラウンドについて

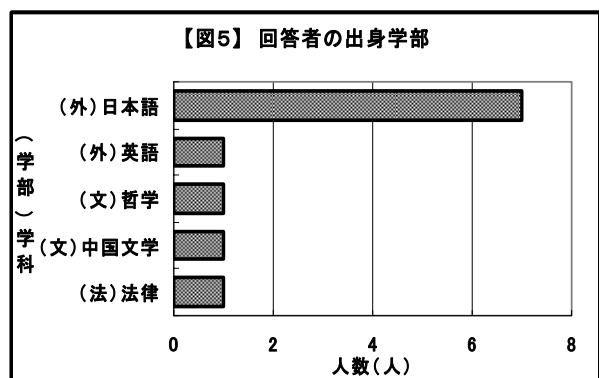


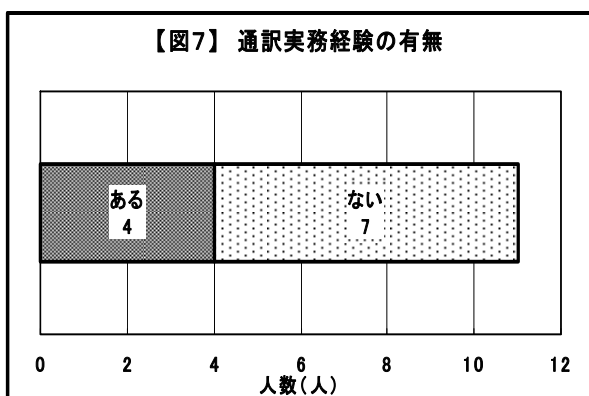
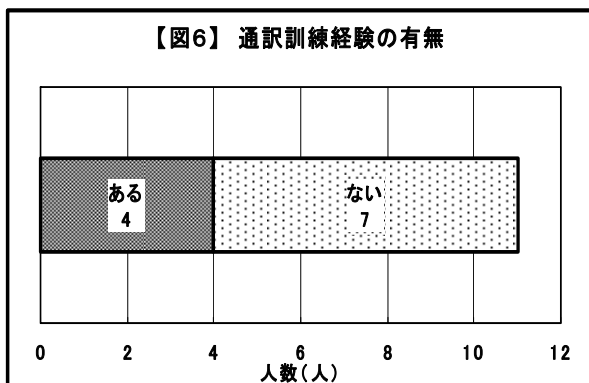
最初にアンケート回答者のバックグラウンドについて説明する。回答者11名のうち4名が日本人、7名が中国人という構成である(図3)。

それぞれの中国語もしくは日本語学習歴についてしてみると、11名のうち、学習歴5~6年の者が最多の8名となっており、7~8年と答えた者は2名、10年以上と答えた者は1名となっている(図4)。



次に回答者の出身学部についてだが、受講者の出身学部についてそれぞれ見てみると、7名の中国人学生は全員、国語学部日本語学科出身であるのに対して、日本人学生4名の出身学部は、外国語学部英語学科、文学部中国哲学学科、文学部中国文学学科、法学部法律学部といったようにすべて異なっている点も1つの特徴であるといえる(図5)。





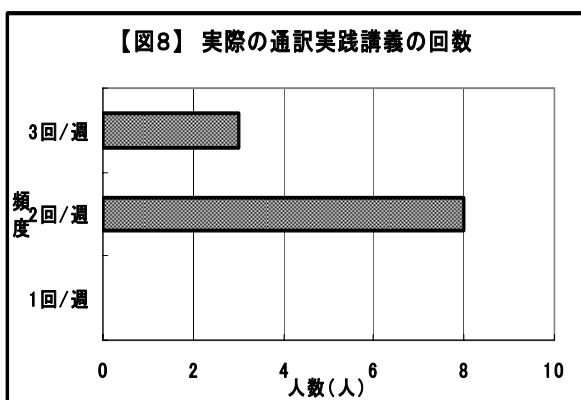
当該課程入学以前の通訳訓練経験については、経験のある者が4名、未経験の者が7名という結果になった(図6)。

当該課程入学以前の通訳実務経験に関しては、経験者と未経験者の数が図6と全く同じ結果となった(図7)。

しかし、訓練未経験者がすなわち実務未経験者、訓練経験者が実務経験者というわけではない。通訳の訓練・実務ともに経験のある者、訓練・実務ともに未経験の者、訓練経験はあるが実務経験のない者、訓練経験はないが実務経験のある者、というようにそれぞれである。

4.2 通訳実践授業全般について

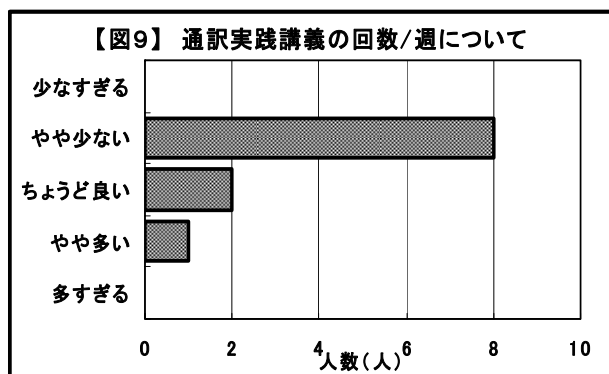
次に通訳実践授業3科目全体に関連する質問を行った。冒頭に掲載している時間割表を参照していただければ分かるように、3科目とは『通訳理論と実践(日中通訳)』『通訳理論と実践(中日通訳)』『同時通訳実践』のことである。



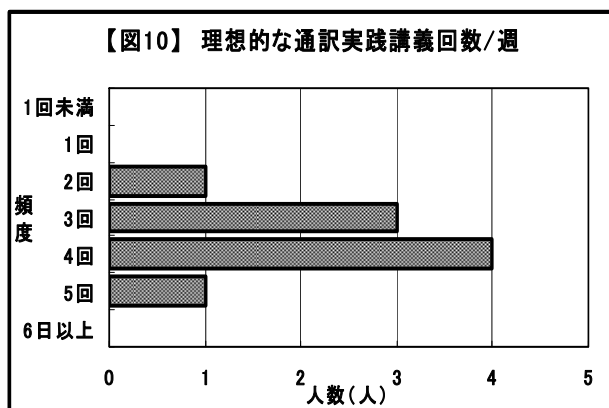
まず、授業の受講回数についてだが、11名中3名が3科目全てを履修しており、8名は2科目履修しているという結果であった(図8)。なお、

既述の塚本慶一杏林大学教授、津田守大阪外国語大学教授による集中講義には当該コース在籍学生が全員参加していることをここで申し添えておく。

では、現在の通訳実践授業の1週間あたりのこの回数を、受講生達はそれぞれどのように感じているのだろうか。結果は、「やや少ない」と感じている者が最も多く、11名中8名であった。「ちょうど良い」と感じる者は2名、「やや多い」と感じる者は1名であった(図9)。



全体的に授業の回数が増えることを希望する学生が多いようだが、具体的にはどの程度を希望するのか、という問いに対して「週4回が望ましい」と答える者が4名、「週3回」が3名、「週5回」、「週2回」を希望する者がそれぞれ1名ずつという結果になった(図10)。



通訳実務経験のある者の具体的な仕事内容は次の通りであった。

- エージェントに登録して、展示会の通訳やアテンド通訳を行った。
- 知人の紹介で、展示会の通訳を行った(入口での受付・応対がメイン)。
- 知人の依頼で、アテンド通訳・テーブル通訳を行った。

仕事の獲得経路に関しては、エージェントに登録していた者は1名のみにとどまり、他の者はすべて知人の紹介や依頼によるものであった。

4.3 それぞれの通訳実践講義について

自由回答形式により、各自が受講する講義への評価・要望などに関して答えていただいた。以下、個別にその回答を挙げていく。

4.3.1 月曜3・4限『通訳理論と実践(中日通訳)』について

a) 前期の定期課題の意義について

- 同時通訳専攻者以外の学生にとっては、自分の専攻科目との兼ね合いもあり、週1回という課題量はやや負担が大きい。しかし、通訳翻訳学理論の基礎を学ぶことができたことは有益だった。
- 課題量はもう少し多くてもよかったように思う。
- 指定書籍の内容はその後の学習に役に立ったと思う。
- 通訳翻訳学の基礎が全く無かったので、指定文献を読むのに苦労した。
- そこで得た知識がどのような場面で役に立っているのか、まだよくわからない。
- 内容が理論的過ぎて、実用性がない。

- これまでに練習を含め通訳をする経験が全く無かったので、理論書を読んでも実体験と比較することができず、実感として捉えることができなかった。通訳の練習をある程度こなした上で読むとさらに役立ったかも知れない。
- 指定書籍は全て入門書としてふさわしいと思う。
- 通訳の実践に役立つと思う。

b) この授業への評価・要望

- プレッシャーや緊張感があり、その雰囲気がとてもよかった。
- 毎週授業に出るたびに、更にもっとやる気になって終わることができ、モチベーションの持続に有効だった。
- 系統立った授業で、毎回の授業がそれぞれ関連性を持っている。
- 毎回使用される教材が一定のレベルの幅を大きく超えず、外交・政治など絞られた範囲の通訳練習を繰り返すことにより、瞬発力・語彙選択能力などの力がついた。
- 学生1人1人の能力を見て、客観的に改善すべき点をきちんと指摘してくれ、欠点もよい点も両方言ってくれる。
- 学生の陰での努力を見逃さず、時に評価してくれるので常にやる気が持てる。
- 先生のコメントが鋭い。
- 通訳技術・方法および礼儀作法など先生の講義内容は全て実践に役立つものばかりだった。
- 初回授業のあまりの緊張感に驚き、「後遺症」のようなショックがしばらく尾を引いた。
- 学生の意欲・姿勢にばらつきがある。
- もっと厳しく、多くの欠点を指摘してほしい。
- できれば最新の題材も挑戦してみたい。
- 時々、先生の話のスピードがとても速く、メモを取る時間がない。
- 先生の通訳パフォーマンスをいつか見たい。

4.3.2 火曜 3-4 限『同時通訳実践』について

a) この授業への評価・要望

- 少人数で、モチベーション・能力ともに高い人に囲まれて授業を受けられた。
- 実際の現場で使用された生の原稿・音声を使って練習ができた。
- プレッシャー・緊張感がある。
- 実践の通訳でもぶつかりそうな実践的な内容。
- 授業内容が関連性を持ちつつ、段階的に進められていく。
- もっと厳しいコメントがほしい。

- 訳出した内容についてもっとコメントしてほしい。
- たまにはリラックスし雰囲気で行う回があってもいいような気がする。
- 原稿なしで通訳を行うことにより、(至らない部分を含め)本来の自分の力を知ることができる。
- 「慣れてきたかな?」と思った頃に、先生がやり方を変えるなどして新たな緊張感やプレッシャーを生み出してくれる。1年間を通じてマンネリなどが一切なく、ずっと緊張感を保ち続けることができた。

4.3.3 火曜 5-6 限『通訳理論と実践(日中通訳)』について

a) 定期課題(翻訳・レポート)について

- 課題へのフィードバックがもっと欲しい。
- 課題翻訳自体は他の授業でも行われていないのでよかった。課題提出後、自分の間違いや他人の良い点を比較検討する場があればなおよかった。
- 指定論文を読むことは実践において一部参考になった。
- 内容が難しすぎて分からないものもあった。
- 通訳の基礎を固めるには、知識の蓄積がある程度必要なのだろうけど、それと同通の上達方法との間の関連性をいまいち感じない。
- 通訳経験をまとめたような簡単な論文は参考になった。それとは逆に、極めて理論的な論文は役に立ったという実感が無い。

b) この授業への評価・要望

- 先生の厳しいコメントをバネに更に勉強しようという気になった。
- 授業の始めに「ウォーミングアップ」の時間がある。午後の授業で緩みがちな集中力を高めるのに役立った。
- 緊張感を持って授業に参加できた。
- 授業で使用した原稿がバラエティに富んでいる。
- 学期後半の経済関連教材は、先生が背景知識なども同時に教えてくれたので、とても分かりやすかったし、身についた。
- 日文中訳がメインなので、TLがネイティブである学生の訳をたくさん聞くことができ、参考になった。
- 原文にとらわれず、中国語らしい表現・日本語らしい表現を検討しあうことが参考になった。
- 学期の初めに大体の学習計画を知りたい。
- 授業で使用した原稿を配布してほしい。
- いろんな練習方法を用いて授業を進めるのはいいと思うが、時々、その説明が簡略すぎて混乱することがあった。
- 同じ内容を複数の人に通訳させる意味がよく分からない。

5 考察および今後に向けた提案

5.1 北京語言大学日中同時通訳修士課程の特徴と課題

通訳実習授業は、日本語、中国語という2言語特定で、なおかつ他コースの学生の履修が原則として認められていない。また、現在在学中のM1、M2の学生に関しては、学生の個々の語学力に大きなばらつきは見られない。そのうえ、将来プロの通訳者を志す、もしくは通訳に少なからず興味を抱く学生のみが受講しているため、講義そのものの意図や目標が極めて明確なものとなっている。週3回という講義回数に対して、多くの学生は十分満足しているとはいえないものの、上記の理由などによりクラス全体のモチベーションが高く、毎回の授業において緊張感を保ち続けることが可能となっている。

次に課題についてだが、現時点では、通訳実践授業の定期課題の一環として通訳翻訳学関係資料の講読が行われるにとどまっており、通訳学理論講義は開講されていない(前掲図1 専門科目時間割表参照)。これは人材の確保が難しいという点が最も大きな要因である。そしてこれは同時に当該課程の直面する最大の課題であるといえる。2007年7月の時点で、当該課程にて通訳翻訳学理論の論文指導を行い、なおかつ修士課程生の指導教官となる資格を有する教員は1名であり、その教員の受け入れ可能な学生の人数は1学年につき2名と限られている。中国の大学院では通常、入学時点では指導教官が決定していない。入学後、学生の意向を踏まえつつ教員が最終的に決定するのである。学生は入学後にはじめてこの状況を知ることになる。そのため、当該課程に在籍しているものの、上記理由により当初の希望とは異なり、言語学、文化、文学など他分野の論文を書くことになる場合もある。このことによる学生側の若干の動揺があったことも事実である。

5.2 所感および今後への提案

このような学生側のとまどいは、4.3.1のa)において掲載した学生の要望コメントなどからも見て取ることができる。このように通訳理論に関する定期課題への認識、感想が2極化しているのである。この現状への対応如何が、北京語言大学大学院日中同時通訳修士課程のさらなる充実化につながるのではないだろうか。

大阪外国語大学大学院博士前期課程通訳翻訳学専修コースと、北京語言大学大学院日中同時通訳修士課程のそれぞれの具体的成立過程や目的、意味づけ、特徴は異なっているものの、「大学院での通訳者養成を目指す」という理念においては一致している。双方を比較検討することにより、それぞれの直面する課題への取組方法を模索することが可能となった。

大阪外国語大学大学院通訳翻訳学専修コースでは、青山学院大学・染谷泰正教授、千里金蘭大学・水野真木子准教授、神戸外国語大学・船山伸他教授による通訳理論講義がそれぞれ開講されている。共通言語が一つあれば、このように受講

生の専攻言語がどれほど多言語に渡っていても、通訳理論講義は開講可能であることが分かる。北京語言大学大学院フランス語コースでは通訳理論講義が行われている。北京語言大学は大阪外国語大学を参考とし、このフランス語コースと合同講義として通訳理論講義を開講することも可能なのではないだろうか。あるいは大学の枠を越え、北京市内の他大学院との協力による通訳理論講義開講も検討できるのではと筆者は考える。

一方の大阪外国語大学大学院博士前期課程通訳翻訳学専修コースは、高度専門職業人養成をめざし、コミュニティ通訳（司法通訳、教育通訳、医療通訳等を含む）の領域を視野に入れ、日本で初めて大学院に設置された多言語対応コースである。また、修士論文に代わるものとして課題研究論文が課される。

北京語言大学大学院日中同時通訳修士課程と比較した場合、もっとも大きな違いはその対象言語であろう。通訳翻訳学専修コースに関しては、対象言語の範囲が広く、受験生の運用言語および受験言語に対しては基本的に制限を設けていない。現時点で、中国語、タイ語、スペイン語、ロシア語に関しては特定言語と日本語との組み合わせで通訳実習授業が行われている。しかしながら、毎年どの言語の学生が入学するか分からないということもあり、すべての言語ニーズに応え、通訳実践授業を開講・充実化させることは難しいともいえる。これに対し、北京語言大学大学院は対象言語を日本語と中国語に限定している。それゆえに、より多くの通訳実践授業の開講が可能になったのである。このように2言語限定、多言語対応のそれぞれのコースは通訳実践授業、通訳理論講義において互いに独自の優位性を保っており、その交流は日本語、中国語の2言語観に限定されるとはいえず、相互補完的意味を持つといえる。

大阪外国語大学大学院博士前期課程通訳翻訳学専修コースは、2005年4月に開設され、2007年4月に第3期生が入学した。一方、北京語言大学大学院日中同時通訳修士課程も、同年9月に第4期生の入学を迎えたばかりの開設まもないコースである。それぞれの国において初めて開設された両コースは共に草創期にあるため、多くの取り組むべき課題を抱えているのはごく当然であるといえる。そのような点も踏まえつつ、互いに参考にしあう事ができれば、この交流は双方にとってより有意義なものになる。交換留学プログラムのよりいっそうの拡大、充実化も視野に入れ、今後もこれを継続していくべきであろう。

謝辞：本稿執筆にあたり、大阪外国語大学・津田守教授、北京語言大学・俞曉明教授、吳琚助教授、芦木通保講師から貴重なご助言、ご指導を頂きましたことに、深く感謝申し上げます。アンケートに積極的にご協力いただいた北京語言大学日中同時通訳修

士課程の皆様にも心よりお礼申し上げます。また、松下国際財団の温かいご支援により今回の留学が可能となったことも申し添えます。

著者紹介：岩本 明美 (IWAMOTO Akemi) 大阪外国語大学大学院博士前期課程在籍 (通訳翻訳学専修コース)。大学学部 (法学部法律学科) 在籍当時から司法通訳問題に関心を持ち、大学卒業後、中国へ留学。現在、司法通訳翻訳と法人類学の学際的分野に興味を持っている。Email: acha12033021@yahoo.co.jp

【註】

- 1) () 内の呼称は、日本政府による「平成 13 年度草の根無償資金協力案件『北京語言文化大学日中同時通訳修士課程機材供与計画』贈与署名契約式」をもとにしている。詳細は在中国日本国大使館ウェブサイト (http://www.cn.emb-japan.go.jp/index_j.htm) を参照。
- 2) 詳細は、大阪外国語大学 (2005, pp.1-4) を参照。
- 3) 日本でも、2007 年 4 月に、国内の大学および大学院で初の日中通訳者養成の講座が杏林大学大学院国際協力研究科に誕生した。詳細は杏林大学ウェブサイト (<http://www.kyorin-u.ac.jp/>) を参照。
- 4) 「通訳理論と実践」は同名のものが 2 科目存在し、それぞれ、日本人、中国人教員が担当している。2 科目を区別する必要がある場合、前者を「通訳理論と実践 (中日通訳)」、後者を「通訳理論と実践 (日中通訳)」としている。
- 5) 詳しくは長谷川 (2006, pp.3-11) を参照。
- 6) 通訳基礎練習の種類については、塚本 (2003) を参照。なお、スラッシュリーディング、サイトトランスレーションに関しては講義中に時間を設け体系的な説明がなされている。

【参考文献およびウェブサイト】

長谷川正時 (2006) 『通訳メソッドを応用したシャドーイングで学ぶ 中国語難訳語 500』スリーエーネットワーク

大阪外国語大学 (2005) 『世界の大学・大学院における通訳翻訳学プログラム』

塚本慶一 (2003) 『中国語通訳者への道』大修館書店

北京語言大学ウェブサイト <http://www.blcu.edu.cn/>

在中国日本国大使館ウェブサイト http://www.cn.emb-japan.go.jp/index_j.htm

